

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫防除技術情報（第1号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしくお願いたします。

記

1 情報の内容 麦類赤かび病の防除の徹底について

2 発生要因の現状

- (1) 一次感染源となる子のう胞子の飛散量は4月第1半旬は少なく推移していたが、第2半旬に急増し、特に西条市で多くなっている（表1）。
- (2) 1か月予報（4月6日 高松气象台発表、4月8日～5月7日）では、気温は高く、降水量は平年並の予報であることから、発病にはやや助長的であり、播種時期の遅い圃場や追加防除を行っていない圃場では、発生が多くなる恐れがある。
- (3) 本病が最も感染しやすい時期は、出穂から4～5日経過後の開花始期から10日間であり、この時期に温暖で降雨があると感染に好適となる。
- (4) 開花期以降も、気温が高く降雨が多いと二次感染が助長される。

表1 麦類赤かび病菌の子のう胞子飛散状況

		3月			4月	
		第4半旬	第5半旬	第6半旬	第2半旬	第2半旬
松山市上難波	令和5年	4	28	9	10	25
	平年	28.9	20.5	42.4	33.5	33.5
西条市丹原	令和5年	1	20	21	12	90
	平年	11.1	9.4	16.1	20.3	19.3

（単位：カバーガラス（1.8cm×1.8cm）2枚分の胞子個数）

注）明日山考案による胞子採集器を西条市丹原、松山市上難波の麦栽培圃場内に設置。

平年値は令和4～平成25年の平均値。

◎子のう胞子飛散状況は病害虫防除所ホームページの「調査データ」にて随時更新しています。

3 防除上の注意

- (1) 本病が最も感染（一次感染）しやすい時期は、裸麦、小麦ともに開花始期から10日間であることから、この時期に当たる圃場では必ず防除を実施する。
- (2) 開花期の防除時期に当たる圃場は防除を行うとともに、1回目の防除を行った圃場では1回目防除の7～10日後に追加防除を実施する。
- (3) 乳熟期以降も気温が高く、連続した降雨があると、二次感染が起こり発生が増加する。出穂25日後頃までが、この二次感染防止に有効な追加防除時期になる。
- (4) 防除薬剤は、トップジンM剤、ワークアップ剤、シルバキュアフロアブル等を使用する。これら薬剤は、カビ毒(DON等)の含有濃度を低減する効果が高い。
- (5) 薬剤散布に当たっては使用基準を遵守し、周辺作物に飛散しないよう注意する。なお、トップジンM粉剤 DL、同水和剤は、麦類（小麦を除く）では出穂期以降1回以内、小麦で出穂期以降2回以内、スミトップ粉剤は総回数1回の使用となっているので使用回数に注意する。